

おわりに

豊後駿

以上第3章では「街と人」というテーマから、そのつながりから見えてくる、これからの都市における課題や可能性をさぐってきた。以下では各節の結論を簡単に整理していく

黒井は、山形県山形市における、自分の高校時代の街の取り組みと現在での変化に目を向けた。ここでは、観光客の声、住民の声に対して街事業の主体が耳を傾けることの重要性を説き、そこには「共通の目的」が必要だという。しかし、そこには、観光客、地域住民に対しての情報共有の不足の課題があげられると結論づけた。

豊後は、東京、山形の首都圏の都市、地方都市に目を向けた。都市間における商店街つながりから派生する、商店街と住民の近い距離感。加えて、街と街同市の連携こそがこれからの商店街存続のカギになるのではないかと結論づけた。

五十嵐はキャラクターによる、地域活性化の形に注目した。震災前までは住民主体で行われていた活動が、震災後には行政も関与することになった変化に目を向け、今後は住民が行政のキャラクターを用いた取り組みを住民がしっかり見つめていく必要性を論じた。

渡部は宇都宮と他地域の主体について女性の立場から考察した。中では、行政の委託事業など民間のアイデアを尊重する活動にも注目しており、これからは、そういったアイデアの創出が市民にとっては楽しみになり、それがUターンなどにつながることに。そして、街にとっては地域貢献の一環として双方でwin-winの関係が地域発展には不可欠だという。

最後に岩崎は大宮市と宇都宮市の交通事情を比較し、そこから宇都宮市バス交通の課題を論じた。宇都宮においては環状線が他に比べ発展してはいるものの、速達性を重視すべきだと結論づけた。そのためには、住民の需要をしっかりと知り、情報共有するシステムづくりが必要だと説いた。

街と人にかかわりは当然のように、不可欠の要素であるが、そこには情報共有の点など課題がいまだに残っている。街づくりの主体が住民の目線から事業をすすめる必要がこれからさらに必要となってくるであろう。最後に本章作成にご協力いただいた方々に感謝の意を表して、この章を閉じたい。